

生存科学研究ニュース

VOL.18.No.3 2004.1 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

年頭の辞

—武見太郎生誕100年を迎えて—
理事長 江見 康一

年頭に当って一言ご挨拶申し上げます。

昨平成15年は、21世紀の日本の向うべき道をどう方向づけるか、ということが問われた年でありました。11月9日に総選挙が行われましたが、その点は必ずしも明確になりませんでした。マニフェスト選挙の争点の一つに「年金改革」がありましたが、かなり厳しい帳尻合わせが示されました。

それは過去の時点における少子高齢化の進行についての予測が甘かったツケが回ってきた、ともいえるでしょう。この点、故武見会長が昭和30年の時点で、約15年後の高齢化社会の到来と、それへの対応に警鐘を鳴らしていた先見性に学ぶべきでした。

平成15年は、武見会長の没後20年であったことから、生存科学研究所はそれを記念して、機関紙『生存科学』タイプAに特集を組み、武見太郎の唱導した「生存の理法」の今日的意義を問う諸論文を掲載いたしました。幸い、その内容は各方面の反響を呼び、政府の唱える構造改革の規定には「生存の理法」的思考が必要であることへの理解が深まったと思います。

平成16年は、武見太郎生誕100年に当たります。それを記念して、生存科学研究所は記念論文集の続編(タイプB)を刊行しますが、同時にたとえば「年金問題」についての抜本改革のあり方などについても、研究所としての考え方を提示したいと思っています。新しい年は、

このような目的に向かって研究体制を強化し、その研究成果が社会に還元でき、さらに会員の皆さんの評価が得られるよう努力する所存でございますので、引き続きご鞭撻とご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

時の人

生存科学研究ニュースでは、今年から生存科学研究所に関わりの深い方、執行部、ニューフェイス等、本財団をめぐる人々にインタビューを行い、会員の交流の場としたいと考えております。



第1回目は平成15年度より生存科学研究所の評議員をお引き受け下さいました日立製作所研究開発本部技師長の小泉英明氏にお願いしました。

同氏は、日立製作所の研究者、指導者として分析科学から医用装置開発へと幅広い活躍をされています。昨年はMRIがノーベル医学賞で注目されましたが、同氏も日立製作所でMRI、

ファンクショナル MRI の開発に従事され、現在もさらに新しい観点のもとに学問を発展されている、日本を代表する方です。

問 小泉先生は 30 台半ばに武見先生とお会いして、それ以降武見先生から大変大きな影響を受けられたと伺っておりますが、一番大きな影響はどのようなことでしたか？

答 私が武見先生に最初にお会いしたときに先生から「自分でやろうとすることの一番根底に人間を置いて立て直してごらんさい」と言われました。今までのサイエンスは、Science for science の傾向がありましたが、武見先生がおっしゃったことをよく考えてみると Science for human という考え方に行き着くのではないかと思います。これがまさに先生からの宿題に対する私の回答でして、長年私の研究に対する姿勢となっています。

問 今また、光トポグラフィーによる脳内解析法が大変な関心を集めています。先生の現在のお仕事およびご関心のあることについて簡単にお教え下さい。

答 私はもともと物理からスタートしたのですが、中学、高校の頃から測るということに関心がありました。最初は大学で原子物理学を学び、原子を測ることからスタートし、企業に入り、環境のために有害元素を測る方法を開発、さらに分子を測る新しい方法を開発しました。

研究分野を大きく変えるきっかけとなりましたのは、1980 年初頭に発表された MRI に関する論文です。当時イギリスを中心に研究が進んでおり、日立製作所としても開発に着手することとなりました。人間を測るというこのプロジェクトをスタートしたちょうどその時、武見先生とお会いしたのです。

X線、CT はすでにあつたわけですが、MRI は体の中の軟部組織を見ることができる画期的な機器でした。その画像の医学的な意味づけを調べる課程で、急速に医学の方に近づき、特に MRI の研究対象は中心が脳であったため脳科学の世界に入って

ゆきました。最初は形態学的な研究が主でしたが、これも武見先生が「これからの時代は形態ではなくて機能だよ」「形態と機能の両方が同時に計測できたら、それが最終目的に近い」とのヒントを下さり、それがファンクショナル MRI の考え方につながりました。

さらに心を測るというのが、一番先にある目標でしたが、人間の脳の機能を普通の状態で、逐一変化する状態を測定できるよう開発した光トポグラフィーが今実用化の段階に入っています。一言で心といいましても、mind (精神)、情緒、情動 (heart)、霊性 (soul) もあるし、人間の尊厳はどこにあるのか等も測りたいと思っています。一部、意識などはそろそろ測れるところまで来ています。

問 生存科学研究所のこれからの役割、あるいは可能性について、小泉先生はどのようにお考えでしょうか？

答 私は武見先生からお声をかけていただき、第 2 回目の生存科学研究会から、先生のご存命中はずっと研究会に参加しました。研究会の司会は、毎回武見先生が勤められましたが、異なる分野の参加者の議論の本質を即時に見抜き、一見バラバラになりそうな議論を最後に大きく纏め上げられていました。その学識、思考の深さにはいつも感嘆いたしました。いま 20 年が経ち、国際会議などに参加するたびに武見先生の提唱された人間の全体を包括する考え方が、世界の潮流になりつつあるとひしひしと感じます。

私自身も武見先生からの宿題として、異分野融合のモデルを一生懸命考えてきたところですが、今は国のプロジェクトとして動的な仕掛けを作りながら、取り組んでいます。これを大きな流れにしていきたいと思っています。武見先生のお考えを国のプログラムに結びつけるところまでやっとなってきたという感じです。

これからがまさに正念場であり、武見思想が花開くときです。先生の思想を若くて

パッションをお持ちの方に引き継いでいて欲しいと思っています。生存科学研究所にもそのような役割を担って欲しいと思います。

平成 15 年度第 1 回
医療システム改革の基礎研究会

平成 15 年度第 1 回は、10 月 3 日（金）午前 10 時半より国立社会保障・人口問題研究所会議室にて開催された。

1. 今年度の方針
 - ・ 2 年計画の 2 年目になるため、今後月 1 回程度の頻度で研究会を開催する。
 - ・ 既に決まっている今後の予定
2004 年 3 月 生存科学研究所に報告書を提出
2004 年 9 月 17 日 最終研究会：rewrite 原稿（for publication）を持ち寄る
2. 「日本の医療費が低い理由」について議論
 - ・ 社人研 Web Journal 2004 年 6 月発行号の特集として企画する。
 - ・ このテーマで今後何度か集中的に議論を重ねる。
 - ・ 価格の比較に関して、今中先生に OECD プロジェクト報告書等を調べてもらう。
 - ・ 泉田が OECD Health Data 2002 の内容を詳しく調べる。
3. 全体の構成案について議論
 - ・ 11 に社会保障財源論が必要ではないか。
 - ・ 9（保険者・支払側からみた医療システム改革）のサンプル（未定稿）を配布

平成 15 年度第 2 回
医療システム改革の基礎研究会

平成 15 年度第 2 回は、11 月 14 日（金）午後 2 時より国立社会保障・人口問題研究所会議室にて開催された。

1. 基礎データの検討
 - ・ Compendium of Health Statistics 2002（UK）の国際比較を中心に日本の位置を確認
 - ・ Labor Costs に関する 6 か国比較
2. 「日本の医療費が低い理由」について議論（継続）
 - ・ 「医療費に対する公的介入と医療費の関係」について分析プランの説明（遠藤委員）
 - ・ OECD Health Data 2003 をもとに比較可能性を検討
 - ・ 価格の比較に関して、引き続き OECD 報告書等を調べる。
3. 「8. 高齢者医療」に関して
 - ・ 死亡者数の将来予測：現在の 2 倍に増加（必要なサービスを提供できるか？）
 - ・ 老人医療費の将来推計：現在の 2 倍以上

川崎病研究会

平成15年10月24日（金）午後4時から生存科学研究所会議室において表記研究会が開催された。内藤寿七郎委員長の挨拶後、直江委員の司会で、研究報告、質疑応答がなされた。



写真は、研究会後、内藤先生の97歳のお誕生日を祝して、全員で先生のご長寿を祝福しているところです。

研究所日報

- 10月3日（金） 第1回医療システム改革の基礎研究会
- 10月25日（金） 川崎病研究会
- 11月14日（金） 第2回医療システム改革の基礎研究会

- 11月15日（土） 21世紀におけるバイオエシックスの構築研究会打合せ
- 11月17日（月） 中長期基本構想委員会
- 11月25日（金） 第3回常務理事会
- 11月25日（金） 編集小委員会
- 12月18日（土） 代替医療と国民医療費研究会

編集後記

今号の生存科学研究ニュースは、いかがだったでしょうか。この紙面を会員諸兄とのコミュニケーションの場にしていきたいと考えており、読者欄「窓」を設けようと思っています。是非、ご意見、ご感想、近況等をお聞かせ願いたく存じます。事務局宛、お待ちしております。

平成16年は日本の進路にとって重要な意味をもつ年になりそうですが、本研究所も大きく動き出してゆく感があります。

本年も宜しくお願い申し上げます。

（小島静二）